



フェノロサ夫人の

東京日記

Apr.1897 - May.1900

村形明子 編

岸田夏子 画



岸田劉生（私の生家之図）1927年『新古細句銀座通』より

九十一、クリスマス・イヴ

一八九七年二月三日（木）（続）

銀座を歩く。すべてのクアンコーバ（勸工場）と一部の私設店舗は提灯等で飾られている——長いロープに吊した数多の赤提灯の列、それらに書かれた紅白の漢字。エタラ流しの歌い女が通る。初めて乞食を見た。アメーヤ（館屋）が多い。

青い股引を藁で結び、大きな厭らしい赤ら顔の猿を背負った、種馬のように利口そうな顔の男——長い袖のある色褪せた緑のキモノ（着物）を着ている。日本人乳母の綿入れの着物の下に背負われた、美しい外国人の子ども。奇妙な取り合わせだが、とびきり暖かく幸せそうに見えた。

別の光景——二歳の子を背負った十四歳くらいの少女。子は大きな人形を背負い、人形の背には小さな人形——都合四者一組。すべて同じ容貌、いずれも満面幸せそのものの笑み。ヨミセ（夜店）はスイセン（水仙）と美しい翡翠色の碗や皿で一杯。この時間お堀は素晴らしい眺め。魚、ご飯、サケ（酒）、蜜柑、キャンデーや菓子のお店は大繁盛。

麗な洒落た蓑編み函、他にゲームや玩具本も買い足して帰宅。夜私の部屋でプレゼントの用意をする。翌朝スズキが食堂にそれらを差し入れ、八時にそこで朝食と決めた。

請求書を支払う——十一日間の家事と市場の買物に二十八円、先週の石炭代七円は別。この料理人を雇う限り、毎月二百五十〜三百円以下に支出を抑える望みはない。家賃と使用人の給料は恐るべき額、料理人は法外だ。新年には替えなければならぬ。ツルを訓練しようと思案中、何とかできる筈だ。夜『虚栄の市』。

九十二、プレゼント交換／アンとアーサー

代替え／地震／ダストストーム

一八九七年クリスマス「二月二五日（土）」

上天気。私が日本で経験した最も長い晴れ続き。全員八時ちょうどに階下に降りて来た。プレゼントは食堂に用意。わが愛するアーネストに、私からはフィリップスの修辞学の本と（半分冗談に）日本のノートブックだけ。アンが彼のために、黄色いリボンつきのとても綺麗な紙屑籠を手作りしたのは嬉しかった。とても見栄えがする。アンには彼から素敵な緑のズキン

二月二四日（金）

クリスマス・イヴ！ 誰もいつもの仕事をしない。アンと私は午前中ちよつとした買物がてら散歩。アーネストと私の散歩は午後。アランにピンクと白の米粉の貝——それぞれ玩具やキャンデー、玉や棒入り——の籠、ヨークン（羊羹）、モナカ（最中）、ペパミント・トライアングル等を買う。それからクアンコーバ（勸工場）へ。

今まで見たことのない輝き。いずこも明るく刷新。モン（門）入口付近は松竹飾り、日常家庭用品の素敵に新しい籠、箱、桶、手桶。文房具売り場には新デザインの便箋が目立つように吊されている。最大の見物は玩具売り場——歴史的事件、芝居の名場面等をあしらった羽子板、左団次、団十郎他の優れた似顔絵、花貝、蝶、鳥、薊等を象った羽根突の素晴らしい羽子。えも言われぬ絹の玉「手鞠」、日本人形、西洋人形、独楽、イローハ「歌留多」等のゲーム、ミニチュアのチャールズ・セット（茶の湯・茶道具一式）、風呂桶、屏風、家具。豪華な布張りの覆いをつけた乳母車。アンとアランそれぞれにカメラのキャンディ用の綺